

◎書評にこたえて

難波 功士（関西学院大学）

まず、戦争に関して透徹した思索と徹底的な調査を続けている新進気鋭の研究者たちが、真正面から本書に取り組んでくださったことに謝意を表したい。さまざまな論点を出していただいたが、いずれも編者の本テーマに対する思考の浅さ、「踏み込み」の足りなさを再認識させられるご指摘であった。

本書は、集合のベン図で言うと、「軍事基地の円」と「アメリカの円」との重なった部分をテーマとした。だが、それら二つの円の重なりを扱っていることを深く自覚しないまま、目の前にある（あった）「米軍基地」について論じがちであったことは否めない。こうした場合、編者が俯瞰的な視点をとり、より幅広いパースペクティブのもと、個々の論文を依頼し、配置していくべきなのだが、本書では編者がもっとも自身の興味に引きずられ、対象の面白さにとらわれてしまっていた。

当然のことながら、軍事基地は米軍だけの専売特許ではない。日本がかつて台湾・朝鮮・中国などに設けた軍事的な拠点は、その地の人々にどのように眼差されたのか、周囲に何らかの文化的な影響力を及ぼしたのか等々の問題は、編者の意識にはなかった。軍事基地や占領の比較社会史といった視点があれば、「基地文化≒消費文化」としてあった米軍基地文化の特異性をより鮮明にできたと思う。

また、二つの円の重なりであることをより深く考えていけば、「アメリカナイゼーション≒文化的消費」≒本土／軍事基地≒政治（的闘争）≒沖縄」といった安易な対置を、もう少し回避できたと思われる。軍事・暴力を含んだ「政治」と生活様式全般にわたる「文化」とを、二項対立的にとらえるのではなく、「すべての政治の中に文化があり、すべての文化の中に政治がある」ことに留意すべきだった。

反省ばかりを述べているようだが、個々の執筆者の名誉のために申し添えるならば、それぞれ実証のレベルは高く、これまで看過されてきた視点・論点を提出した力作ぞろいだと編者としては自負している。それでもまだまだ語りきれ（てい）ない問題が浮き彫りになってくることこそが、この社会における「米軍基地文化」の存在の大きさの証左であろう。今なお、女性史や占領期の文化政策に関する著作が出版され続けている（平井 2014；茶園 2014；北村 2014）。『占領期生活世相誌資料』シリーズの刊行もスタートし（永井 2014）、韓国の米軍クラブについての検討も始まった（東谷 2014）。「軍事基地」「アメリカ」「文化」を三つの頂点とするトライアングルな研究領域は、まだまだ理論面でも実証面でも手つかずの状態にあると言ってよい。

難波個人としては本書刊行後、韓国ロックと米軍基地の相関を面白がったり（長谷川 2014）、三島由紀夫とアメリカとの関係について読み（南 2014）、三島の UFO 趣味の産物としか思っていなかった『美しい星』が米軍基地小説でもあることを教えられたり、「ハーフ」に関する新たな問題提起がありながら（岩淵 2014）、伊良部秀輝のことを考えたり（田崎 2014）、横浜不良文化の回顧本に触発され（菅 2014）、キャッシー中島の自伝を読んだりしているだけなのだが。ちなみに最近興味をそそられたのは、江戸時代の道徳・倫理とされるものが、米軍基地由来のものではないかと

いう件（原田 2014）、そしてジャズやカントリー&ウェスタン以外の音楽も、基地から聴こえてきていたという指摘である（輪島 2015）。

歴史のディテールを楽しみつつ、前述のトライアングルの問題系に多角的かつ理論的に取り組んでいくことを、今後の課題としていきたい。

参考文献

- 岩渕功一編, 2014, 『〈ハーフ〉とは誰か——人種混淆・メディア表象・交渉実践』 青弓社.
- 北村洋, 2014, 『敗戦とハリウッド——占領下日本の文化再建』 名古屋大学出版会.
- 菅淳一, 2014, 『横浜グラフィティ』 幻冬舎.
- 田崎健太, 2014, 『球童』 講談社.
- 茶園敏美, 2014, 『パンパンとは誰なのか』 インパクト出版会.
- 東谷護, 2014, 「ポピュラー音楽にみる「アメリカ」——日韓の米軍クラブにおける音楽実践の比較から考える」『グローバル研究』 成城大学グローバル研究センター.
- 永井良和編（山本武利監修）, 2014, 『占領期生活世相誌資料①敗戦と暮らし』 新曜社.
- 南相旭, 2014, 『三島由紀夫における「アメリカ」』 彩流社.
- 長谷川陽平, 2014, 『大韓ロック探訪記』 DU BOOKS.
- 原田実, 2014, 『江戸しぐさの招待』 星海社新書.
- 平井和子, 2014, 『日本占領とジェンダー』 有志舎.
- 輪島裕介, 2015, 『踊る昭和歌謡』 NHK 出版新書.